

# コロナ禍における「博物館資料論」実施 および履修生の「文化財」への意識変化

山本 さぎり\*

## はじめに

2020年度から2年間、明治大学博物館課程で兼任講師として「博物館資料論」を担当する機会を得た。

明治大学で本授業を担当した時期は、コロナ禍が国内全域に拡大し(それどころか世界的規模に拡大)、いまや「ウィズコロナ」社会を生き、日常生活全般に影響を受けている。当然本務や兼任先の大学にも影響が及び、オンライン授業の実施が必須となるなど全体の組み立てや個別の実施を随時変更することにもなった。

本学に先んじて、文教大学で2013年度から2020年度まで非常勤講師として学芸員資格課程の授業を担当し、うち2013年度から2015年度まで「博物館資料保存論」を担当した。この3年間で学生の文化財への意識変化について調査した成果を“「博物館資料保存論」履修生にみる「文化財」についての意識変化”<sup>1</sup>として執筆した。

これまで担当した授業の初回に必ず履修した理由を聞いている。本授業の履修生は、学芸員資格を取得するための課程であることから、博物館等の文化施設に興味がある、学芸員資格を取りたいという学生が多い。いっぽう資格取得は考えていないが内容に興味を持ち履修したという者もいる。続けて「文化財」という言葉について尋ねると、文化施設に頻繁に行く者であっても、言葉は知っていても

具体的に考えたり調べたりせず、授業で教えられるものと認識しているように見受けられる。これは担当した大学や授業を問わず同じ反応である。

このような反応こそ、授業を通して履修生から文化財について意識に変化が見られるか興味をもつようになったきっかけである。前述の拙稿では3年度分をまとめ考察し、本務先(博物館・図書館等)での活動に生かしている。

そして本学で同様の授業を担当する機会を得た<sup>2</sup>ことで、これまでの手法を踏襲しつつ大学の授業運営方針に従い、かつ学芸員として現場の状況をリアルタイムで伝える方法で授業を実施した内容と、コロナ禍で日々不安を抱えるなかで、履修生に文化財についての意識変化が見られるか、そもそも考える余裕があるのかに焦点をあて、成果を本稿で考察した。

折しも本稿を執筆中に、東京国立博物館で「150年後の国宝展—ワタシの宝物、ミライの宝物トーハクこれからの国宝」<sup>3</sup>が開催中である。本展は東京国立博物館史上初の公募型展覧会であり、個人や企業から集められた“ワタシの宝物”を「150年後の国宝候補」として展示している。大規模館での展示であるためメディアでも目立つが、10年以上前に拙稿を出していたこと、本展と同時期に続編にあたる内容を執筆したことは、「文化財」を考

\*早稲田大学図書館資料管理課

えていくうえで意義があると考える。

## 1 授業の実施方法

### 1.1 授業計画

授業の基本計画は2年度とも同じで、文教大学での3年間と組み立てを踏襲している。特定のテキストは設定せず毎回レジメを配布。授業に関連する報道ができれば、旬の情報であり格好の教材となるため、その都度事例として紹介した。

授業の前半では、資料、「文化財」の定義から資料の素材・種類ごとの劣化原因や扱い方・保全方法を紹介することで、資料の観察・記録の重要性、保全・継承への意識を高めていけるようにした。後半では、資料を収集・保存・公開する施設が数種類あるだけでなく、街ぐるみの保存活動、博物館等施設の地域とのかかわりなど、広範囲かつ長期的視野での資料のありかたについて解説した。

全14回の組み立てを下記に記す。1テーマを2回分の授業にあてた回がある。

- a. 「文化財」について、および日本における文化財保護の歴史
- b. 資料の材質と劣化の要因や、資料保存のための環境管理
- c. 具体的な資料の保全方法について（伝統的手法と自然科学的手法）。資料の状態調査による現状把握と修復前調査、修復
- d. 資料の活用方法。複製の作成・デジタル化等とその活用（展示・オンライン等）について
- e. 資料の梱包・輸送について（講義と実技）
- f. 文化財の財産としての扱い（評価額や動産保険など）と知的財産権（主に著作権）について
- g. 被災資料の保全について：資料の被災防止と救援活動、被災資料についての記憶と記録

- h. コロナ禍での文化施設の対応、コロナ禍を資料として収集する取り組みについて
- i. ユニバーサル・ミュージアム、エコ・ミュージアムといった地域における博物館の役割と、その広がりについて

授業実施では以下のことに留意した。

- a. オンライン・対面にかかわらず出欠をかねてコメントを必須とした。初回は本授業を履修した理由について、以降は授業に沿ったテーマについての意見と「授業全体や文化施設全般、学芸員資格など興味のあること」とし、次回以降にフィードバックした。
- b. 海外出身の学生もいたが、授業は日本語で行い、不明の点があれば授業時間外も含め対応をした。またテーマごとに海外事例も紹介した。

授業を通して話したことは、価値観は人・地域・時代で変わること、現在「文化財」としているものは、もともと個人や組織が大事にして伝えたものということである。資料梱包の回では自分の持ち物の破損を防ぐ梱包を施せば、身近な「思い出の品・大切な品」を保存・保管できること、被災資料レスキューの回では身近にある大切なものをできるだけ救出し持ち主に返すこと、毎年国内でもどこかで災害があり、自分や身近な人々に降りかかるかもしれないことから、大切なものを救うことが、ひいては文化財を保存し記憶や記録を伝えていくことへ繋がることを解説した。

そして期末試験では、定義された「文化財」という枠を外し履修生自身にとって「文化財」と考えたものを挙げて述べることをレポートの課題とした。

### 1.2 年度で実施内容が異なる点

シラバスは対面授業前提で作成したが、大学の方針に従い2020年度は全てオンライン

授業、2021年度は第3回までオンライン授業、以降は対面授業が可能となり、それぞれの年で実施内容を変更した。よって各年度で変更した内容について記す。

### 1.2.1 2020年度

全授業がオンライン実施となり履修生による実技とフィールドワークが実施できなかった。

実技は文化財梱包と輸送の番組を上映したあと、WEBカメラを通して梱包の実演を見せた。

フィールドワークは臨時休館中や、開館していても団体の受け入れを中止していた施設が多いこと、履修生の外出を勧めることができなかったことで実施しなかった。いっぽうで「おうちで見る博物館」といったオンライン公開を実施する施設が増えたことから、オンライン公開している施設を2か所選び、コロナ禍での対応について相違点や気づいたことを、授業中盤のレポート課題として出した。ただし個人の意思で訪問した施設を書きたい場合も可としたため、2か所のうち1か所はオンライン公開、1か所は現地訪問で考察する者もいた。

またコロナ禍により緊急事態宣言が初めて発出した年として、各文化施設が臨時休館を余儀なくされた間や開館再開後に行っている取り組みを紹介した。

例えば当時NHK放送博物館の学芸員であり、担当展覧会「放送が伝えた宇宙」展<sup>4,5</sup>は会期中の展示替えの日に緊急事態宣言が初の発出をした。翌日の後期展示開始日から臨時休館となり、再開館未定状態のまま展示は予定の会期末日となり終了した。つまり展示後期の準備ができていながら展示室を開けることがかなわなかったため、後日展示風景を「おうちで見る宇宙展」としてオンライン公開<sup>6</sup>した。

授業を担当した時期は、12月から開催する

担当展覧会「キトラ古墳壁画 国宝への道のり ～四神をとらえたカメラ～」の準備中であり、準備から開催までをリアルタイムで紹介した<sup>7,8</sup>。

またユニバーサルミュージアムの説明では、コロナ禍の「触れない」状況下で、障害を持ち触る必要がある人々がさらに困難な生活を余儀なくされている状況を博物館が対応していく事例を紹介した。

### 2.1.2 2021年度

第1回から第3回まではオンライン授業、第4回から第14回(最終回)までは対面授業を実施した。対面授業が再開されても気を付けることが多く、履修者が手を触れる参考図書や現物の回覧は避けた。

NHK放送博物館で担当したミニ展示「展示で見るNHKの新型コロナウイルス感染症情報」<sup>9</sup>を紹介し、コロナ禍の対応をリアルタイムで展示にして公開しかつ記録として残す意義について解説した。

開講時は早稲田大学へ転職し図書館で勤務を始めた時期と重なり、古典籍を扱う業務全般(収集・保存・公開など)から、資料の扱いかたや古典籍のオンライン公開方法を解説した<sup>10,11</sup>。

この年度は実技やフィールドワークの実施ができたが、コロナ禍であるため配慮することが増えた。よって項目を分けて具体的な実施内容を述べる。

#### 2.1.2.1 資料の取り扱い実技について

資料の取り扱い実技では、資料状態調査用シート、薄葉紙、紙の和綴じ体験用の紙や糸を人数分準備し配布した。ハサミなど複数で触るものは、感染症対策のため使用しなかった。まず、普段の持ち物をよく見て記録する調査用シートに記載した。続いて薄葉紙は手で割いて紐(こより)を作り、実写が和装本の綴じを実演しながら説明し、続いて実際に綴

る作業をしたり、薄葉紙で梱包したりした。

### 2.1.2.2 フィールドワークについて

開館しても団体の人数制限をすることが多く、かろうじて1回実施できた。それは、同じ建物内にある2施設「港区みなと科学館」「気象庁気象科学館」(東京都港区)である。選んだ理由は団体訪問の受け入れを再開したことはもちろんのこと、履修生は文学部所属が多くコメントでも個人で行く施設は人文系が多いことから、訪問するのであれば自然科学系施設をと考え探していたためである。

見学当日に、レポート提出内容として「見てほしいポイント」を下記のとおり提示した。

- ・コロナ禍での来場者に体験してもらうための感染症対策について
- ・授業を受けて得た視点での博物館運営について

例) 展示の工夫・スタッフたちの対応、その他気づいたこと。コロナ禍前と同施設を訪問している場合は、その時の比較など。

当日参加できない者については、文化施設2か所を訪問し、当日参加者と同じ内容の課題を出した。なお訪問先を2か所にしたのは団体訪問時と条件を合わせるためであり、参考として2施設を選び訪問する例を複数提示した。

### 2.1.2.3 出前授業の実施について

団体見学ができない代わりに、オンライン講義や出前授業を始める施設が増えた。そのなかで印刷博物館が教育支援事業として出前授業(対面・オンライン)を開始した。そこで対面での学芸員による出前授業を実施し、対面参加できない場合用に録画配信も行った<sup>12</sup>。

講義内容は「日本の印刷の歴史」と印刷博物館の業務について。質疑応答では事前に

募った質問と、会場で出た質問に対応いただいた。授業後にはコメントで感想や質問を受け付け印刷博物館へ提供し、質問については印刷博物館からの回答を履修者へフィードバックした。

学芸員2名のうち1名は本学出身者であることから、先輩としてのメッセージ、後輩から先輩への質問という意見交換ができた。もう1名は、学芸員資格を持っていても、はじめは博物館の運営元の企業に入社しさまざまな業務をしてきたこと、ひいては博物館で勤務するためのアプローチは複数あることを話したところ、さらに詳しく質問した者がいた。

## 3. 期末定期試験のレポート課題について

課題内容は下記のとおり。文章量は、A4用紙2~3枚程度(超えても良い)。A4版1枚あたり約1,000字程度。

「文化財指定の有無にかかわらず、自分にとって《文化財》と考えるものを1件以上選び、下記について他者へ説明することを想定して述べること」

- a. 選んだものについて、それが自分にとっては文化財であると考えた理由
  - b. その保護・保存の必要性・方法と、周囲や後世へどのように伝えていきたいか
- 《補足》

・指定の有無にかかわらず、有名・無名のどちらでも、身の回りで気づいたものでもよい。

・「1件以上」とは、単体でひとつでも、集団でひとまとまりでもよく、またこれらを複数取り上げてよい。

・対象は、有形・無形・芸能・風習・生物・景観や建造物群(自然や町並み)など、ほとんどのものとし、古代から現代に至る、いつ時代の物事でも良い。

(課題を出したあとの質問も含め、例として「食」や普段使っているもの、様々な媒体の

キャラクター、宇宙のことも対象とすることを補足した。)

加えて「本課題の結果を研究成果や報告として活用することがあるため、内容を出して欲しくない場合は意思表示をすること、個人情報を出さないこと」を注記した。また、本課題への質問は随時受付け、質問・回答は情報共有のため履修者全員に周知した。

#### 4. 「文化財」とした内容について

履修生が「自分にとっての文化財」と挙げた内容を表1に示す。2020年度45名、2021年度44名の計89名であり2学年次秋学期開講のためか2年生がほとんどを占めた。海外

出身者も含まれる。

研究成果や報告としての活用に全員異議がなかった。挙げた内容は、項目を分けて論じている場合は1項目ごとに1カウントとし、1項目の中で例として複数挙げている場合はまとめて1項目とした。選んだ理由については、論じられている文章を単純化し執筆者の意図が変わることを避けるため最小限の補足する程度に留めたが、内容はどれも興味深く惹きつける内容である。

また文教大学で実施した結果を表2として掲載する。項目は本稿に合わせたため、本来の表は前述の拙稿<sup>1</sup>を参照いただきたい。

表1 「博物館資料論」課題レポート結果 2020年度～2021年度実施

自分にとって「文化財」と考えた内容		
	2020年度	2021年度
1	真岡鐵道線のSL	1 ニッポンのカワイイ文化
2	自身が幼・小・中・高を過ごした大好きな町（を守ること）	2 山西花饅頭（中国の山西省）
	漫画「こちら葛飾区亀有公園前派出所」	3 形の無い歴史的に価値のある芸能や技術全般
3	フィギュアを中心とする模型	4 日本のアニメーション
	化石や、遺跡から出土する動植物遺体や古人骨	5 佐賀県鹿島市にある文化財 祐徳稲荷神社(日本三大稲荷)/有明海の干潟
4	「商店街のまち吉祥寺」の歴史を伝える「ハーモニカ横丁」	6 横浜の街並み（神奈川県横浜市）
5	漫画（全般）	7 歴史的な価値のある文化財や実在する偉人を擬人化あるいはキャラクター化したソーシャルゲーム
6	古都奈良の景観	8 「出版物」、「映像作品」、「音楽」、「舞台芸術」
	伝承遊び（昔ながらの子どもの遊び）	9 埼玉県川越市の「蔵造りの町並み」
7	山車	10 『刀剣乱舞』とその影響
	アナログの「印鑑（ハンコ）」文化	11 ポケットモンスター
8	口承による戦争の記録	12 首里城継承のための礎を築く
9	茨城県水戸市にある偕楽園及びその周辺の水戸徳川家に関する神社・美術館	13 富士山とその地域一帯
10	益子焼で考える「文化」	洋食
11	東京駅	14 手袋人形
12	白川郷・五箇山の合掌造り集落	15 「水戸学」、「弘道館」
13	書道	16 東京ディズニーランド、東京ディズニーシー
	寿司(Sushi)	17 日本刀
14	千葉県の鋸山にある石切場跡	18 むいから古民家園（狛江市立古民家園）
15	歌舞伎における「保護しない」という保護の仕方	19 木簡
16	ライブエンターテインメントの記録映像	20 文字
17	漫画（全般）	21 刀剣「石田正宗」
	高尾山（八王子市）	22 家族が写っている写真類全体
18	甲州街道「イチョウ並木」（八王子市）	23 越中富山の菓売り
	プロテニス選手のロジャー・フェデラーの姿が刻印された「記念硬貨」	24 漫画（全般）
19	横浜市鶴見区生妻で行われる「蛇も蚊も祭り」という伝統行事（お囃子）	25 和菓子文化

自分にとって「文化財」と考えた内容		
	2020年度	2021年度
20	日本刀	26 繊維の織り方
21	なんの変哲もない住宅街の景色などの、人の生活感に溢れた風景	27 八王子「多摩織」
21	ネットという文化：人々の手で作り出されるこの大きなインターネット社会	28 カードゲーム
22	箸	29 家紋
23	旧海軍艦艇の慰霊碑	30 アンネの日記
24	世田谷城（世田谷区）	成田山新勝寺
25	日本の「菊」文化、とりわけ菊花展	31 コミックマーケットを始めとする同人誌即売会
26	日本における「温泉街」	32 阪神甲子園球場とそこへ宿る野球文化
27	蒸気機関車保存の重要性	33 第五福竜丸（東京都江東区）
28	沼津駅前のアーケード街	34 史跡等の指定・未指定を問わず、「遺跡」と呼べるもの
28	座間市の大凧祭り	35 北鎌倉隧道（通称「緑の洞門」）
29	長野県南信濃村の霜月祭り	伝統的造り
30	漫画（全般）	36 日本のアニメーションとその技術
31	衣服（全般：過去・現在）	37 会津大塚山古墳（福島県会津若松市）
32	出身高校の学校改革を行う前の制服や校風	38 うごくメモ帳（ニンテンドーDSiまたはニンテンドー3DS系列で使用できるダウンロードソフト）
33	発掘調査報告書	39 歴史的建造物と景観の保全。（鎌倉や川越などの寺院やそれを含む町の景観）
34	高度経済成長期における集合住宅	40 演劇
35	登呂遺跡	41 浜松まつり（静岡県の浜松市）
36	横浜国立大学教育(人間科)学部附属横浜中学校	ポケットモンスター
	神道関連の歴史	42 サークルアルバム
37	岡本太郎「太陽の塔」	サークルレコード（アナログレコード）
38	コンピューターゲーム	43 音楽（近現代）
39	下野谷遺跡（東京都西東京市）	44 永青文庫（東京都文京区目白台）
40	SNS(Instagram、Twitter、mixi、2ちゃんねるなど)	
	能	
41	銭湯のペンキ絵	
42	南平和児童遊園（東京都町田市）	
43	我が家の食文化	
44	武蔵一宮氷川神社と、その参道（埼玉県さいたま市大宮区）	
45	地域の歴史について（文化の歴史・災害の歴史）	

## 5. まとめ

本稿では文教大学での成果とあわせて考察するため、「大学が異なることで生じる相違点」「博物館資料論」の担当が5年ほど開いた<sup>13</sup>ことの影響（社会的状況の変化など）を考慮した。

### 5.1 大学が異なり、社会的状況が変わっても同様のこと

- a. 課題で挙げるものは、実質「なんでも良い」と言っているに等しい。これはテーマを限定するより難しいかもしれない、

だからこそ出したテーマである。そして毎回「こういうもので本当にいいのか」という質問が出た。また、レポートを書くにあたり文化庁の文化財についての定義「我が国の長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産」がどういうことなのか考えたという記載も複数あった。これらから、自分が文化財だと思ったこと・ものを、自分なりに考え論じた者が確実にいると考察する。

- b. ジェンダーステレオタイプから見ると、



表2 文教大学「博物館資料保存論」課題レポート結果 2013年度～2015年度実施

自分にとって「文化財」と考えた内容	
2013年度	2014年度
1 ファッション	1 生まれた三重の里のさまざま
2 鹿島神宮のお祭りと人と人とのつながり	2 オタク文化
3 おふくろの味 米川の水かぶり（宮城県）	3 ゆるキャラ
4 アニメ・マンガ 食品サンプル	4 韓国のもの：キムチ 韓国のもの：テッキョン（脚戯、伝統武芸）
5 空間・景色（直島）	5 歌舞伎
6 長崎における文化	6 歌舞伎
7 小倉百人一首	7 日本語
8 「和服」と「小布施 着物でまち歩き」	8 横浜市歌
9 地獄谷	9 身のまわりの書籍、なかでも藤子・F・不二雄
10 言語ごとの「あいさつ」	10 日本の歴史・精神・文化
11 桜	11 日本独自の行事
12 横須賀市そのもの	12 輪島塗
13 横浜山手西洋館と山手本通	13 言葉（方言、流行語）
14 家庭での餅つき	14 給食
	15 中国の文語文
	2015年度
15 着物を着る文化	
15 花火	1 熊本県 五家荘
かまくら	有名・無名問わず全ての「伝統」について。
16 ドラえもん	2 秋田県小坂町 康楽館（芝居小屋）
17 重要無形民俗文化財 小峰入りとチャッキラコ（神奈川県）	2 十和田湖
18 童話	3 日本アルプス（飛騨山脈）をメインとした自分の地元について

挙げられた内容に性別での傾向は見受けにくい。今回は履修生の性別内訳を記載したが<sup>1</sup>、本稿では記載をしていない。

- c. 「文化財」としたいもの・ことの種類や属性は、有形・無形ともにあり、具体的（個別・ジャンル全体）、抽象的・概念的なもの、出身やその周辺地域などさまざまである。
- d. 出身地域のもの、日常のこと、身近にあること残していきたいというだけでなく、知って欲しいという意欲が感じられたレポートがある。
- e. 無形文化財の保存・継承として「人々の関心をなくさないようにしていくことが重要」論じているものもある。
- f. 前回の拙稿で「目を引いたこと」として取り上げた、言語に関わる事項は今回もあり、すでに使用頻度が下がっている言

葉を見直し大切に・使い続ける必要性を指摘したものもあった。

## 5.2 大学が異なり、社会的状況の変化が見えること

- a. コロナ禍の影響から挙げたものがある。具体的には触って使うもの（アナログの印鑑・玩具）、外食人口の減少による飲食店の危機と影響（洋食の継承）、大学のサークル活動の継承である。なかでもサークル活動については、停止のため対面で集まる活動ができなくなったことから、継承の危機をメディアが報じている<sup>14</sup>。執筆者はまさにこの状況にあり、文化財として保存と継承方法を考えたのである。
- b. SNSが多岐にわたり普及しているからか、オンラインコンテンツとして音楽や

ゲームの著作権や保存・継承が増えた。これもコロナ禍による外出制限で、オンラインコンテンツの利用が増えた影響があると考えられる。

- c. 漫画、ゲームといったテーマの中に、これらそのものの記述や世界的広がりを文化財とするものだけでなく、コラボ内容への関心を広げることに意義を見出し文化財としている。さらに継続と保存については、アナログの場合とデジタルの場合の両方を記載したり、クラウドファンディング、サービス終了後の対応などを具体的に挙げている。
- d. 歴史的建造物と景観の保全、観光と日常生活との兼ね合いでは、数百年のものを残す代わりに数十年のものを失くすこと、文化財指定することで生じるデメリットや人材育成について指摘している。
- e. 上記に深くかかわることだが、化の振興・継承についてジェンダーステレオタイプや地域の閉鎖的な部分、文化的差異等から生じる差別問題に踏み込んで考察しているものがある。

## おわりに

本授業を2年間実施し、文教大学でのデータもあわせて考察したところ、履修生は文化財には有形・無形にかかわらず、そして自分の身近なことや体験したことを改めてふりかえり、自分にとっての文化財であると考え保存・継承も意識することができたと考察する。実際、授業後のコメントには毎回質問があり、資格取得目的でなく興味から受講した学生からは、自分の専攻や興味のあることと、授業の内容をつなげて考えるコメントがあった。そして期末レポートで、自身の文化財に対する意識の変化について述べた者もいた。

むろん本授業だけでなく、他の授業も履修し見識を深めていることの影響もある。いずれ現在の文化財の定義が変わる可能性があ

る。本課題で履修生が挙げたなかで未指定のもの、これからも文化財と考えたものが、いずれ文化財指定されるかもしれない。

いっぽう筆者も都度新たな知見を得られ、異なる視点にも気づかされるなど刺激を受け、文化財に対してさらに視野を広げることになった。この興味深いテーマを、間が空いたとはいえ授業を通じて実施した意義はある。

例えばフィールドワークのコメントでは、「今まで興味がない分野の館を見学したが面白かった。他の授業でも先生から言われていたことだが、今回のことで興味のある・なしにかかわらず訪問したい。」というものがあつた。

2年間のコメントで何より多かったのは、コロナ禍が続くことでの現在と将来の不安についてである。特に学生の縦横(卒業生含む)のつながりが無く、情報交換の機会があれば教えて欲しいという要望が複数あつた。このことを周囲に情報共有するとともに、自身にもできることとして、先に出前授業で述べた通り印刷博物館の出前授業が実施できた。講師の学芸員のうち1人は本学の卒業生であるため、先輩としてのメッセージ、後輩から先輩への質問という意見交換ができた。この交流は現在でも他授業で受け継がれていることである。

2020年度は全てオンライン授業であっても、リアルタイムで展示の準備を紹介したことで「展示の準備が知ることができてドキドキした。」というコメントがあつた。この展示をフィールドワークとして行くことはできなかったが、個人で来館した者がいた。

また「オンラインが増えたらそれで用が済むと考え、活動制限が緩和されても来館・来場者がかなり減るのではないか？」という質問が出た際は「観劇や資料実物を生で見聞きし触れることで受ける感動は変えられない、それを知っている人たちはオンラインでは我慢できず戻ってくる。」と回答した。これは、



行動制限が緩和し制限をされていてもチケットが完売したり行列をしていたりしていること(コロナ禍前の人出までは戻っていない)、海外で制限撤廃をした反動が大混雑している様子から見て取れる。

不安な日々を過ごすなか、急激な変化で授業運営がスムーズにいかない、オンラインと対面の両方の準備をしたなど対応に迫られた面も多いが、新たな工夫ができた経験は大きい。オンラインでできることはたくさんあるが、対面でできることの重要性も再認識できた。

そして文化施設勤務という視点で、世界中の文化施設が試行錯誤する事例を調査し、現場で実施可能なことは取り入れたこと、それを授業で紹介したことが一つながりとなる貴重な機会となった。

これからも資料と身近に接する方法が生み出されるであろう。現在担当している業務でも新たな取り組みを実施している<sup>15,16</sup>。人に問いかけるのであればまず自身への問いかけをし、立場が変わっても情報収集とフィードバックを続けていきたい。

## 註

- 1 山本さざり「博物館資料保存論」履修生にみる「文化財」についての意識変化(文教大学国際学部紀要 第27巻1号)
- 2 文教大学には「博物館資料論」を複数の科目名にあてていること、2012年度からの改正学芸員養成科目でできた新課程の「博物館資料保存論」は、「博物館資料論」担当教員が担当することが想定され(文化庁「改正学芸員養成科目に関するQ&A」より)、双方の授業内容に重なる部分が多いこと、明治大学で担当するにあたり「博物館資料論」のシラバスを参照したうえで、基本的な流れを同様とした。
- 3 東京国立博物館「150年後の国宝展—ワタシの宝物、ミライの宝物—これからの国宝」<https://150ourtreasure.jp/> (2022年11月10日取得)
- 4 NHK放送博物館企画展示「放送が伝えた宇宙」<https://www.nhk.or.jp/museum/event/219120701.html> (2022年12月25日取得)
- 5 NHK放送文化研究所 文研ブログ#225“NHK放送博物館で「放送が伝えた宇宙」の展示を開催中です”<https://www.nhk.or.jp/bunken-blog/700/417627.html> (2022年12月25日取得)
- 6 “おうちで見る宇宙展”NHK放送博物館企画展示「放送が伝えた宇宙」みどころダイジェスト<https://www.nhk.or.jp/museum/event/220051901.html> (2022年12月25日取得)
- 7 NHK放送博物館企画展「キトラ古墳壁画 国宝への道のり ～四神をとらえたカメラ～」<https://www.nhk.or.jp/museum/event/220102401.html> (2022年12月25日取得)
- 8 NHK放送文化研究所 文研ブログ#281“NHK放送博物館で「キトラ古墳壁画 国宝への道のり ～四神をとらえたカメラ～」の展示を開催中です”<https://www.nhk.or.jp/bunken-blog/700/438831.html> (2022年12月25日取得)
- 9 NHK放送博物館ミニ展示「展示で見る NHKの新型コロナウイルス感染症情報」<https://www.nhk.or.jp/museum/event/221030201.html> (2022年12月25日取得)
- 10 早稲田大学図書館 古典籍総合データベース <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/> (2022年12月28日取得)
- 11 早稲田大学文化資源データベース [https://archive.waseda.jp/archive/vm-top.html?arg=%22vm\\_carousel\\_max%22:10&lang=jp](https://archive.waseda.jp/archive/vm-top.html?arg=%22vm_carousel_max%22:10&lang=jp) (2022年12月28日取得)
- 12 「印刷博物館の教育支援概要」明治大学での出前授業を事例紹介 <https://www.printing-museum.org/support/about/> (2022年12月25日取得)
- 13 文教大学で「アート・マネジメント論」を2013年度から2020年度まで担当していたため、大学非常勤講師としてのブランクはない。
- 14 NHK NEWS WEBサークル文化は終わった？どうなる大学生の友人関係 <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210921/k10013271021000.html> (2022年12月25日取得)
- 15 山本さざり「高精細画像から見えてくるもの—重要文化財『杉田玄白肖像』に描かれた本—」

(早稲田大学図書館報「ふみくら」第102号、  
p2、2022年)  
16 ティムソン ジョウナス・山本 さぎり「早稲  
田大学図書館における貴重資料のデジタル化

の取り組みについて ～これまで・現在・そ  
してこれから～」(早稲田大学図書館報「ふみ  
くら」第102号、pp3-6

## The impact of the coronavirus pandemic on the implementation of “Museum Collection” and changes in student thinking regarding “Cultural Assets”

YAMAMOTO Sagiri

For two years from the 2020 academic year, I taught “Museum Collection” as a part-time lecturer in the Meiji University Course for Prospective Museum Workers. It was a time when the coronavirus pandemic was spreading throughout Japan. The fact that it was greatly affected by daily life in general naturally affected the place of work and the management of the university, and the implementation of classes was forced to change. Under these circumstances, we focused on how the two-year class was implemented and whether the students’ awareness of cultural properties changed as they had daily anxiety and considered the results.

Prior to Meiji University, I taught “Museum Resource Preservation Theory” at Bunkyo University and wrote the results of a survey on changes in students’ awareness of cultural properties. In this paper, to consider the results obtained at Bunkyo University, we consider “differences caused by different universities” and “the impact of the five-year opening of the “Museum Collection” (changes in social conditions, etc.).

As a result, we concluded that even in the situation of the corona disaster, even if the future is rather uncertain, students can look back on what is close to them and what they have experienced, and have an awareness of what cultural assets are for them and how to preserve them for the future.